

論文

子どもの自己肯定感に及ぼす影響要因に関する 実証研究

——京都子ども調査をもとに——

郭 芳¹⁾・田中弘美²⁾
任 セア³⁾・史 邁⁴⁾

要約：本研究では「京都子ども調査」を分析することにより、子どもの自己肯定感に及ぼす要因を確認し、それらの要因の自己肯定感への影響の程度について、実証的に検証した。その結果、自己肯定感に影響を与える要因には「性別」「経済的要因」「関係的要因」があることが実証された。また、経済的要因の自己肯定感への影響はある一方で、「親・親戚との関係」「学校での生活」「友人の有無」という関係的要因のいずれもが自己肯定感に影響していることが明らかになった。その程度については、「親・親戚との関係」のなかでも【親への信頼】、学校生活のなかでも【学校生活享受感】や【学業満足感】、「友人の多さ」などがとりわけ重要であることがわかった。さらに、学校生活や友人との関係は男女に共通して非常に重要な要因であったが、親との関係については男女で重要となる要因に若干の違いもみられた。

キーワード：自己肯定感、影響要因、因子分析、階層的重回帰分析

目次

1. はじめに
2. 研究方法
 - 2-1. 用いるデータ-「京都子ども調査」の概要
 - 2-2. 分析方法
 - 2-3. 倫理的配慮
3. 研究結果
 - 3-1. 分析対象者の概略
 - 3-2. 自己肯定感の合成指標
 - 3-3. 「自己肯定感の影響要因」の探索的因子分析
 - 3-4. 変数間および各変数と子どもの自己肯定感との相関
 - 3-5. 階層的重回帰分析の結果
4. 考察
 - 4-1. 自己肯定感に及ぼす影響要因の影響程度

1) 同志社大学社会学部助教

2) 同志社大学研究開発推進機構特任助教

3) 同志社大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程

4) 同志社大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程

*2018年6月21日受付，2018年7月2日掲載決定

- 4.2. 自己肯定感に影響を及ぼす「関係的要因」
- 4.3. 性別による自己肯定感の影響要因の差異
- 5. おわりに

1. はじめに

日本では、自己肯定感の低い子どもが増加しているといわれる。国際比較調査では、日本の子ども・若者はアメリカ、中国、韓国などの子どもと比べて自己評価が低く、自己肯定感も低いことが報告されている（古荘 2009；日本青少年研究所 2009）。また、自己肯定感の低い子どもは、学校や社会のなかでうまく適応できない傾向にあることが、教育や医療の現場から指摘されている（高垣 2006；河越・岡田 2015）。

他方、近年子どもの貧困に関する研究が盛んであり、その要因や解決策についてさまざまな視点から研究されている。そのなかで、貧困家庭の子どもたちは自己肯定感が有意に低いことが、調査をとおして明らかにされつつある（阿部 2015）。こうした研究は、貧困やそれに付随する不利・困難を克服するうえで、子どもの自己肯定感を高めることの重要性を示唆する。

では、子どもの自己肯定感がどういう場合に高まり、どういう場合に低くなるか、つまり、子どもの自己肯定感に影響を与える要因はどういったものなのだろうか。子どもの自己肯定感に及ぼす要因について、一般的に考えられているのは「経済的要因」である（阿部 2015）。その一方で河越・岡田は、「大学生の自己肯定感」に影響を及ぼす要因として、「学校生活」、「父との関係」、「母との関係」、「親の夫婦関係への認識」の4つを挙げ、なかでも「学校生活の人気」⁽¹⁾が自己肯定感に最もプラスの影響を及ぼすことを示した。この研究は、自己肯定感を考える際、経済的要因だけでなく「親との関係」や「学校生活」などの要因を考慮すべきという示唆を与える点で重要である。しかしながら、この学校生活のなかには教師との関係や勉強などが含まれているが、具体的にどの要素の影響が大きいかまでは分析されていない。さらに、上記の結果は他の年齢の子どもに当てはまるかどうか、検証される必要があるだろう。

フレイザーら（2009）は、自己肯定感を貧困リスクへの重要な防御促進要因として捉えている。同様に、家族における防御促進要因としては、「良好な親子関係」が第一に挙げられている。また、「思いやりのある大人（メンターを含む）の存在」が「広範な環境の防御促進要因」であるとし、教師が例として挙げられている（門永・岩間・山縣 2009）。阿部（2015）も、「親と子の良好な関係」と「教師との良好な関係」が貧困による自己肯定感の低下を緩和する要因であると再確認している。

以上の先行研究から、自己肯定感に影響を与える要因には、大きく「経済的要因」と「関係的要因」があると整理できる。しかし、こうした要因のうち自己肯定感に直接影

響しているのはどれか、どの要因が大きく影響しているかは明らかにされていない。

そこで、本研究では、子どもの自己肯定感に及ぼす要因について明らかにした上、それらの要因の自己肯定感への影響の程度について、特に関係的要因に焦点をあてて、実証的に検証することを目的とする。また関係性を考える際、親、教師との関係だけではなく、学校生活、友人との関係も含めて、広く「人」との関係进行分析。これらの関係によって子どもの自己肯定感にどのような影響が出ているかを重回帰分析を通して明らかにしたい。

2. 研究方法

2-1. 用いるデーター「京都子ども調査」の概要

本研究の調査は、科学研究費補助金基盤研究 C「自己肯定感に注目した子どもの『貧困に抗う力』育成のためのサポートシステムの構築」(研究代表者：埋橋孝文同志社大学教授)の一環として、2017年1月～2月の間に実施した。本調査は「京都子ども調査」といい、「子どもを取り囲む社会や経済の状況が、どのようにして子どもの成長や夢、希望、日々の生活に影響しているかを調べ、今後の教育的働きかけのための基礎的資料を得ること」を目的としている。

調査は京都市内の公立中学校 10 校の中学 2 年生およびその保護者を対象としている。調査対象となった学校は、京都市教育委員会事務局が市内 8 ブロックから 1～2 校、生徒数を考慮して抽出した。各学級内で子ども票・保護者票をセットで中学 2 年生に配布、家庭に持ち帰り、子ども票は生徒が、保護者票は主な保護者が記入した。今回の調査は対象生徒数が 2494 件、有効回答数が 1159 件、有効回答率が 46.5% であった。

2-2. 分析方法

今回の調査分析には統計ソフト SPSS Statistics 24 を使い、以下の 3 段階で行った。

まず第 1 段階では、調査紙の子ども票にある子どもの自己肯定感をはかる項目から子どもの「自己肯定感の合成指標」を作成した。男女別による子どもの自己肯定感の差に対して検定を行った。続いて第 2 段階では、子どもの人間関係(親・親戚との関係、学校生活)に関する質問項目に対して因子分析を行った。そして、抽出された因子と、前段階で合成した「自己肯定感の合成指標」との相関分析を行った。

さらに第 3 段階では、他の要因を統制したうえで、どの要因が子どもの自己肯定感に影響を与えているかを明らかにするため、子どもの自己肯定感の合成指標を従属変数とした重回帰分析を行った。独立変数には、回答者の「基本属性」に関する変数(子どもの性別、母親の学歴、父親の学歴)と一般的に自己肯定感と関係が強いと考えられてい

る「世帯収入」（経済的要因）に加え、前記の因子分析から求められた「親・親戚との関係」および「学校生活」に関する因子、さらに「友人関係（友人の多さ）」（関係的要因）とした。

なお、重回帰分析にあたっては、階層的重回帰分析の手法を用いた。すなわち上で述べた変数群を段階的にモデリングすることを通して、各変数（群）のそれぞれのモデルにおける説明力の変化を明らかにした。

2-3. 倫理的配慮

今回の調査は無記名、自記式で行った。調査票は、子ども票、保護者票それぞれを密封し、さらにその2つの封筒を世帯ごとの封筒に密封したまま学校に提出して頂き、学校が密封された封筒を同志社大学に郵送した。また、質問紙を送付する際に本研究の目的と回答内容の活用方法に関する説明文書を添付し、返送をもって同意を得たものとした。分析の際に、個人を特定できる変数は設定せずに統計処理後の定量化されたデータを対象とした。なお、本調査の実施にあたり、「人を対象とする研究計画等倫理審査」を申請し、同志社大学倫理審査委員会の承認を得た（申請者：埋橋孝文、申請番号16074、承認日2017年1月13日）。

3. 研究結果

3-1. 分析対象者の概略

回収された子ども票は1159票のうち、男子428票、女子490票、未記入241票である。回収保護者票は1159票のうち、母1028票、父108票、祖母4票である。

分析対象者の概略を表1に示した。

保護者の最終学歴については、母親の最終学歴は、「高校」が最も多く32.8%、次いで「短大・高専」が29.7%であった。これに対し、父親の最終学歴は「4年制大学・大学院」が最も多い38.9%、次いで「高校」が37.6%であった。

母親と父親の職業について、母親で最も多いのは、「パート・アルバイト・日雇い・非常勤職員」の47.7%であった。続く「専業主婦」は15.7%で、「民間企業の正社員」の14.6%ほぼ同じ割合になっている。父親の職業で最も多いのは、「民間企業の正社員」で54.0%、次いで「自営業（家族従業者を含む）」の18.8%であった。母親と父親の仕事の内容について、母親で最も多いのは、「販売・サービスの職業」の32.9%であった。次いで「専門的職業」は22.4%であった。父親で最も多いのは、「管理的職業」で18.5%、次に「販売・サービスの職業」の16.2%であった。

年間世帯収入については、約5割の世帯が300～700万円の間にある。それより上と

しては、約2割弱の世帯が700～900万円の間であり、900万円以上の世帯も15.6%存在する。一方で、年収が300万円未満の世帯は16.9%、200万円未満の世帯は6.7%になっている。また、回答した世帯のうちの19.9%が就学援助費を受け取っている。なお、2015年度の京都市全体における就学援助費認定率は21.9%である。

3-2. 自己肯定感の合成指標

本調査の「子ども票」では、回答者の子どもたちに、家庭内の人間関係、学校生活、困難にあった時の対応などについて聞いている。そのうち、自己肯定感に関する設問は問13である。自己肯定感の捉え方はさまざまであり、「他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自身で自己への尊重や価値を評価する程度のこと」とするローゼンバーグの考えもあれば、ハーターのような「他者による承認・支援に注目した」考えもある(矢野 2016)。問13の5つの質問項目(表2参照)は、これまで心理学分野で頻繁に利用されてきたローゼンバーグ(1979年)の自己肯定感尺度を踏まえて選定したものである。

子どもの「自己肯定感の合成指標」の作成にあたっては、上述した5つの質問項目へのそれぞれの回答を、昇順(プラスの面が高いほど、点数が高いように)に統一し、「当てはまる」から「当てはまらない」までの5つの選択肢に0～5の点数をつけた。5つの回答を合算し、最低0点から最高20点までの「自己肯定感の合成指標」を作成した。

表1 分析対象者の概略

		項目	度数	%	
子どもの性別	有効	男性	428	46.6	
		女性	490	53.4	
		合計	918	100	
		欠損値合計	241		
		合計	1159		
回答者の続柄	有効	母	1028	90.1	
		父	108	9.5	
		祖母	4	0.4	
		その他	1	0.1	
		合計	1141	100	
				欠損値合計	18
		合計	1159		
親の学歴	有効	中学校	16	1.5	
		高校	348	32.8	
		専門学校	195	18.4	
		短大・高専	315	29.7	
		4年制大学・大学院	186	17.5	
		合計	1060	100	
			欠損値合計	99	
			合計	1159	
	父	有効	中学校	29	3.1
			高校	353	37.6
			専門学校	139	14.8
			短大・高専	53	5.6
4年制大学・大学院			365	38.9	
合計			939	100	
		欠損値合計	220		
		合計	1159		
年間世帯収入	有効	1～50万円	4	0.4	
		50～100万円	14	1.3	
		100～200万円	53	5.0	
		200～300万円	107	10.2	
		300～400万円	124	11.8	
		400～500万円	153	14.5	
		500～600万円	144	13.7	
		600～700万円	98	9.3	
		700～800万円	100	9.5	
		800～900万円	91	8.7	
		900万円以上	164	15.6	
		合計	1052	100	
		欠損値合計	107		
		合計	1159		
就学援助費	有効	受け取っている	226	19.9	
		受け取っていない	894	78.9	
		わからない	13	1.1	
		合計	1133	100	
		欠損値合計	26		
		合計	1159		

表2 子どもの自己肯定感をはかる質問項目（子ども票）

問13 あなたは自分についてどう思いますか。
それぞれもっとも近いもの1つに○をつけてください。

	当てはまる	やや 当てはまる	どちらとも いえない	あまり当て はまらない	当て はまらない
A. 今の自分に満足している	1	2	3	4	5
B. 自分には人に負けない得意分野がある	1	2	3	4	5
C. 自分でも人の役に立てることがあると思う	1	2	3	4	5
D. 自分はダメな人間だと思うことがある	1	2	3	4	5
E. 自分の性格でいやだと思うことが多い	1	2	3	4	5

性別の分布は、男子は12点、女子は10点をピークとした山型の分布となっている。平均で見ると男子は10.81、女子は9.50となっており、t検定を行ったところ統計的に有意差が見られた ($t=4.900$, $df=906$, $p=0.000$)。中学2年生の子どもの自己肯定感には男女差があると言える。

3-3. 「自己肯定感の影響要因」の探索的因子分析

ここでは、子どもの自己肯定感に影響を与えうる変数を検討するため、探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。因子抽出方法としては、主因子法分析の方法を利用し、因子の数の決定は、固有値が1以上である因子だけを選択するように指定した。また、KMO および Bartlett の検定で因子構造と妥当性を確認してその有意性を判断し、因子行列の回転はプロマックス回転（promax rotation）方式を採用した。また、使用された質問項目の内的整合性を確認するためにクロンバックのアルファ（Cronbach's α ）の信頼性係数で信頼性の分析を実施した。

3-3-(a). 家族と親戚に関する変数

子どもの自己肯定感に影響を与えうる変数の1つとして、「家族と親戚」に関する全21項目の中から仮説としての重要性および因子負荷量 .40以上を基準にプロマックス回転による因子分析を行った。

その結果、7項目が削除され14項目からなる「家族と親戚」変数が、第1因子から第4因子までに構成された（表3）。また、KMO が .784以上、Bartlett 検定結果が、すべてのデータの有意水準が0.000であり、信頼性係数 α は .602であった。

表3のとおり、第1因子は「親を尊敬している」、「親は自分の意見をよく理解してくれている」、「親は自分を大事にしてくれていると思う」、「親とよく話をする」という項目から【親への信頼 ($\alpha=.774$)]と名付けられた。

第2因子は「自分の誕生日は必ず家族が祝ってくれる」、「朝食を家で食べている」、

表3 家族と親戚に関する項目の因子分析の結果（主因子法，プロマックス回転，N=1159）

項目	因子負荷量				平均値	標準偏差
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子		
親への信頼 ($\alpha = .774$)						
r02d 親を尊敬している	0.875	-0.151	-0.020	0.007	3.96	1.04
r02h 親は自分の意見をよく理解してくれている	0.771	-0.048	0.068	-0.031	3.72	1.01
r02a 親は自分を大事にしてくれていると思う	0.706	0.194	-0.050	0.038	4.65	0.65
r02b 親とよく話をする	0.615	0.232	-0.017	-0.014	4.48	0.80
親との緊密さ ($\alpha = .494$)						
r03e 自分の誕生日は必ず家族が祝ってくれる	0.107	0.69	-0.031	0.078	4.70	0.67
r03h 朝食を家で食べている	-0.085	0.687	0.007	0.065	4.75	0.74
r02c 親と過ごす時間はあまりない (R)	0.071	0.59	-0.006	0.309	3.55	1.22
r03c 休日の夕食は家族全員揃って食べる	0.103	0.54	0.049	0.069	3.70	1.30
親戚との関係 ($\alpha = .601$)						
r04a 近所に住んでいる親戚がいる	-0.112	-0.046	0.781	-0.004	3.16	1.71
r04b 盆や正月などの節目には、必ず親戚と会う	-0.038	0.069	0.755	0.024	4.31	1.18
r04c 親戚に相談できる人がいる	0.191	-0.001	0.710	-0.014	3.00	1.38
親の学業干渉 ($\alpha = .527$)						
r02e 成績のことでよく怒られる	-0.036	0.005	0.016	0.778	3.10	1.35
r02g 親が口うるさくて嫌になることがある	-0.306	0.119	0.002	0.676	3.65	1.18
r02f 親は自分を必ず大学に行かせたいと思っている	0.300	-0.064	-0.013	0.651	3.26	1.28
	因子間相関		0.435	0.163	1.101	

注：(R) は逆転項目を示す

「親と過ごす時間はあまりない (R)」, 「休日の夕食は家族全員揃って食べる」という項目から【親との緊密さ ($\alpha = .494$)】と命名した。

第3因子は「近所に住んでいる親戚がいる」, 「盆や正月などの節目には、必ず親戚と会う」, 「親戚に相談できる人がいる」という項目から【親戚との関係 ($\alpha = .601$)】とした。

第4因子は「成績のことでよく怒られる」, 「親が口うるさくて嫌になることがある」, 「親は自分を必ず大学に行かせたいと思っている」という項目から【親の学業干渉 ($\alpha = .527$)】と命名した。

また、因子間相関は、第1因子と第2因子の間に .435、第2因子と第3因子の間に .163、第3因子と第4因子の間に 1.101 という相関係数がみられた。また、信頼性係数 α については、第1因子の親への信頼 ($\alpha = .774$) と第3因子の親戚との関係 ($\alpha = .601$) は、信頼性係数 α は .6 以上であり、十分な内的整合性が確認されたが、第2因子の親との緊密さ ($\alpha = .494$) と第4因子の親の学業干渉 ($\alpha = .527$) は信頼性係数 α が .6 未満であった。

3-3-(b). 学校での生活に関する変数

子どもの自己肯定感に影響を与えうる他の変数として「学校での生活」に関する全12項目の中から仮説としての重要性および因子負荷量 .40 以上を基準にプロマックス

表4 学校での生活に関する項目の因子分析の結果（主因子法，プロマックス回転，N=1159）

項目	因子負荷量			平均値	標準偏差
	第1因子	第2因子	第3因子		
教師との関係 ($\alpha = .868$)					
r07j 先生は自分の相談を聞いてくれる	0.887	0.003	-0.023	3.53	1.21
r07h 困った時に頼れる先生がいる	0.838	-0.050	-0.033	3.34	1.28
r07i 尊敬できる先生がいる	0.775	0.039	0.064	3.45	1.32
学校生活享受感 ($\alpha = .770$)					
r07f 学校に行きたくないと思うことがある (R)	0.049	0.809	-0.037	3.01	1.42
r07g 自分の居場所が無いと感じることがある (R)	0.073	0.728	0.012	3.72	1.24
r07l 学校は楽しい	0.180	0.646	-0.024	3.93	1.14
学業満足感 ($\alpha = .562$)					
r07a 成績はいいほうだ	0.089	0.101	0.632	2.75	1.15
r07b 授業が難しくついていけないことがある (R)	0.083	0.112	0.637	2.98	1.22
因子間相関		0.372	0.127		

注：(R) は逆転項目を示す

回転による因子分析を行った。

その結果、4項目が削除され8項目からなる「学校での生活」変数が第1因子から第3因子までに構成された（表4）。また、KMOが.744以上、Bartlett検定結果が、すべてのデータの有意水準が0.000であり、信頼性係数 α は.743であった。

表4のように第1因子は「先生は自分の相談を聞いてくれる」、「困った時に頼れる先生がいる」、「尊敬できる先生がいる」という項目から【教師との関係 ($\alpha = .868$)】と名付けられた。

第2因子は「学校に行きたくないと思うことがある (R)」、「自分の居場所が無いと感じることがある (R)」、「学校は楽しい」という項目から【学校生活享受感 ($\alpha = .770$)】と命名した。

第3因子は「成績はいいほうだ」、「授業が難しくついていけないことがある (R)」という項目から【学業満足度 ($\alpha = .562$)】とした。

また、因子間相関は、第1因子と第2因子の間に.372、第2因子と第3因子の間に.127という相関係数がみられた。また、信頼性係数 α については、第1因子の教師との関係 ($\alpha = .868$)と第2因子の学校生活 ($\alpha = .770$)は、信頼性係数 α は.6以上であり、十分な内的整合性が確認されたが、第3因子の学業満足度 ($\alpha = .562$)は信頼性係数 α が.6未満であった。

3-4. 変数間および各変数と子どもの自己肯定感との相関

以上から析出された子どもの自己肯定感に影響を与えうる変数（親への信頼、親との緊密さ、親戚との関係、親の学業干渉、教師との関係、学校生活享受感、学業満足度）

と自己肯定感の間の相関関係を確認するため、Pearson の 2 変量の相関分析を行った (表 5)。各変数に相当する項目の平均値を算出したところ「自己肯定感 (M=3.36, SD=1.18)」、 「親への信頼 (M=4.21, SD=.88)」、 「親との緊密さ (M=4.18, SD=.99)」、 「親戚との関係 (M=3.49, SD=1.43)」、 「親の学業干渉 (M=3.33, SD=1.28)」、 「教師との関係 (M=3.44, SD=1.27)」、 「学校生活享受感 (M=3.55, SD=1.27)」、 「学業満足度 (M=2.86, SD=1.19)」であった。

自己肯定感と「親への信頼 (r=.305***)」、 「親との緊密さ (r=.312***)」、 「親戚との関係 (r=.163**)」、 「教師との関係 (r=.209***)」、 「学校生活享受感 (r=.505***)」、 「学業満足度 (r=.339***)」は正の相関関係がみられるが、「親の学業干渉 (r=-.153***)」とは負の相関関係がみられた。

表 5 変数間および各変数と子どもの自己肯定感との相関

自己肯定感	自己肯定感	親への信頼	親との緊密さ	親戚との関係	親の学業干渉	教師との関係	学校生活享受感	学業満足度	平均値	標準偏差
自己肯定感	—	.305***	.312***	.163**	-.153***	.209***	.505***	.339***	3.36	1.18
親への信頼		—	.807***	.302***	-.231***	.272***	.316***	.151***	4.21	0.88
親との緊密さ			—	.309***	-.152***	.248***	.310***	.174***	4.18	0.99
親戚との関係				—	.061**	.292***	.216***	.055*	3.49	1.43
親の学業干渉					—	-.070**	.140***	-.206***	3.33	1.28
教師との関係						—	.431***	.169***	3.44	1.27
学校生活享受感							—	.307***	3.55	1.27
学業満足度								—	2.86	1.19

注：*p<.10, **p<.05, ***p<.01

3-5. 階層的重回帰分析の結果

他の要因を統制したうえで、どの要因が子どもの自己肯定感に影響を与えているかを明らかにするため、またそれらの要因の自己肯定感への影響の程度をみるため、下記の 12 の独立変数をいくつかのステップに分け、子どもの自己肯定感の合成指標を従属変数とした階層的重回帰分析を行った。

独立変数は、表 6 とおりである。属性として、①子どもの性別、②母親の学歴、③父親の学歴の 3 変数。経済的要因として④世帯収入 (年収 300 万円未満を低収入とする)、さらに関係的要因として前記の因子分析から求められた親・親戚との関係および学校での生活に関する 7 変数、すなわち⑤親への信頼、⑥親との緊密さ、⑦親の学業干渉、⑧親戚との関係、⑨教師との関係、⑩学校生活享受感、⑪学業満足度。そして、友人に関する 1 変数、⑫友人の多さ (同じ学校・違う学校の友人の有無を「たくさんいる」「まあまあいる」「あまりいない」「全くいない」の 4 段階で聞いたものの合成変数)。合計 12 の変数である。

具体的な分析方法として、表 6 に示した独立変数のうち、まずステップ 1 として属性

表 6 独立変数の概要

属性	1. 性別ダミー 2. 母親の学歴 3. 父親の学歴	男性／女性 中学校・高校卒／専門・短大・高専卒／4年制大学・大学院卒
経済的要因	4. 低収入ダミー	年収 300 万円未満／年収 300 万円以上
関係的要因	親・親戚との関係	5. 親への信頼 r02d 親を尊敬している r02h 親は自分の意見をよく理解してくれている r02a 親は自分を大事にしてくれていると思う r02b 親とよく話をする
		6. 親との緊密さ r03e 自分の誕生日は必ず家族が祝ってくれる r03h 朝食を家で食べている r02c 親と過ごす時間はあまりない r03c 休日の夕食は家族全員揃って食べる
		7. 親の学業干渉 r02e 成績のことでよく怒られる r02g 親が口うるさくて嫌になることがある r02f 親は自分を必ず大学に行かせたいと思っている
		8. 親戚との関係 r04a 近所に住んでいる親戚がいる r04b 盆や正月などの節目には、必ず親戚と会う r04c 親戚に相談できる人がいる
	学校での生活	9. 教師との関係 r07j 先生は自分の相談を聞いてくれる r07h 困った時に頼れる先生がいる r07i 尊敬できる先生がいる
		10. 学校生活享受感 r07f 学校に行きたくないと思うことがある r07g 自分の居場所が無いと感じることがある r07l 学校は楽しい
		11. 学業満足感 r07a 成績はいいほうだ r07b 授業が難しくついていけないことがある
	友人の有無	12. 友人の多さ r11a 同じ学校の友人 r11b 違う学校の友人

および経済的要因と子どもの自己肯定感の関係をみた。次に、ステップ2では良好な親子関係が子どもの自己肯定感に及ぼす影響を検討するため、親・親戚との関係に関する変数を投入した。そして、ステップ3では学校生活における適応性が子どもの自己肯定感に及ぼす影響を検討するため、ステップ2の変数に加えて、学校での生活に関する変数を投入した。最後に、ステップ4では友人の有無が子どもの自己肯定感に及ぼす影響を検討するため、ステップ3の変数に友人の多さを追加した。

3-5-(a). 全体の結果

階層的重回帰分析の結果は、表7に示すとおりである。

ステップ1では、1%水準で性別の標準偏回帰係数 (β) が有意であり、10%水準では低収入も有意であった。 β 値をみると、男子生徒、低収入世帯でない子どもは自己肯定感が高かった。

次に、親・親戚との関係を加えたステップ2では、ステップ1からステップ2における決定係数 (R^2) の変化量は有意であった。性別、低収入とともに、親への信頼、親

表7 階層的重回帰分析の結果

		ステップ1		ステップ2		ステップ3		ステップ4	
		β	有意確率	β	有意確率	β	有意確率	β	有意確率
属性	性別	0.176	0.000***	0.212	0.000***	0.115	0.001***	0.124	0.000***
	母親の学歴	0.056	0.191	0.057	0.156	0.001	0.982	-0.003	0.924
	父親の学歴	-0.020	0.647	-0.008	0.852	-0.048	0.186	-0.041	0.258
経済的要因	低収入	-0.070	0.083*	-0.063	0.093*	-0.058	0.087*	-0.046	0.173
関係的要因	親への信頼			0.231	0.000***	0.155	0.000***	0.162	0.000***
	親との緊密さ			0.091	0.027**	0.021	0.578	0.019	0.615
	親の学業干渉			-0.138	0.000***	-0.064	0.071*	-0.080	0.024**
	親戚との関係			0.087	0.021**	0.048	0.172	0.031	0.371
学校での生活	教師との関係					-0.017	0.628	-0.036	0.317
	学校生活享受感					0.385	0.000***	0.352	0.000***
	学業満足感					0.196	0.000***	0.186	0.000***
友人の有無	友人の多さ						0.127	0.000***	
R^2		0.040		0.165		0.332		0.345	
ΔR^2				0.126***		0.167***		0.014***	

注：* $p < .10$, ** $p < .05$, *** $p < .01$

との緊密さ、親の学業干渉、親戚との関係は β が有意であった。 β 値をみると、男子生徒、低収入世帯でない、親への信頼がある、親との緊密さがある、親の学業干渉が小さい（成績・学業について口うるさくない）、親戚との関係が良好な子どもは自己肯定感が高かった。

さらに、学校での生活を加えたステップ3では、ステップ2からステップ3における R^2 の変化量は有意であった。性別、低収入、親への信頼、親の学業干渉とともに、学校生活享受感、学業満足度は β が有意であった。一方で、ステップ2において有意であった、親との緊密さ、親戚との関係の β は、ステップ3では有意ではなかった。 β 値をみると、男子生徒、低収入世帯でない、親への信頼がある、親の学業干渉が小さい、学校生活享受感や学業満足度が高い子どもは自己肯定感が高かった。

最後に、ステップ4として、独立変数に友人の多さを加えたところ、ステップ3からステップ4における R^2 の変化量は有意であった。性別、親への信頼、親の学業干渉、学校生活享受感、学業満足度に加え、友人の多さの β が有意であった一方で、低収入は有意ではなかった。

以上の分析の結果、ステップ1からステップ4における R^2 の変化量は有意であったということは、ステップ1の属性および経済的要因に、親・親戚、学校、友人など他者との関係性を示す変数を追加することにより、説明力が有意に上昇したことを意味する。つまり、子どもの自己肯定感を説明するうえで、こうした他者との諸関係が有効性をもつことを示す結果が得られた。

3-5-(b). 男女別の階層的重回帰分析の結果

上記で述べたように、性別による自己肯定感の合成指標の分布をみた際、t検定を行ったところ統計的に有意差が見られ、自己肯定感には男女差があると言えた。そのため、ここでは以上の階層的重回帰分析を男女別にわけて行い、自己肯定感に影響を与える要因には男女差があるかどうかを検証した。その結果が、表8、表9である。

男子生徒と女子生徒の結果のいずれも、ステップ1からステップ4における R^2 の変化量は有意であり、説明力が有意に上昇した。

男子生徒と女子生徒にみられる違いとして、第1に、男子生徒の場合、低収入はステ

表8 男子生徒の階層的重回帰分析結果

		ステップ1		ステップ2		ステップ3		ステップ4	
		β	有意確率	β	有意確率	β	有意確率	β	有意確率
属性	母親の学歴	0.057	0.378	0.049	0.409	-0.010	0.848	-0.008	0.882
	父親の学歴	-0.038	0.558	0.014	0.820	-0.022	0.672	-0.006	0.902
経済的要因	低収入	-0.120	0.048**	-0.115	0.039**	-0.097	0.045**	-0.086	0.071
関係的要因	親への信頼			0.192	0.001***	0.108	0.043**	0.120	0.023**
	親との緊密さ			0.176	0.003***	0.100	0.050**	0.100	0.047**
	親の学業干渉			-0.149	0.008***	-0.079	0.106	-0.096	0.048**
	親戚との関係			0.178	0.002***	0.116	0.020**	0.098	0.047**
学校での生活	教師との関係					-0.001	0.981	-0.026	0.621
	学校生活享受感					0.444	0.000***	0.406	0.000***
	学業満足感					0.186	0.000***	0.162	0.002***
友人の有無	友人の多さ							0.160	0.002***
	R^2	0.018		0.184		0.402		0.424	
	ΔR^2			0.167***		0.213***		0.022***	

注：* $p < .10$, ** $p < .05$, *** $p < .01$

表9 女子生徒の階層的重回帰分析結果

		ステップ1		ステップ2		ステップ3		ステップ4	
		β	有意確率	β	有意確率	β	有意確率	β	有意確率
属性	母親の学歴	0.056	0.337	0.060	0.273	0.005	0.923	-0.003	0.947
	父親の学歴	-0.005	0.936	-0.022	0.688	-0.064	0.214	-0.061	0.233
経済的要因	低収入	-0.034	0.542	-0.027	0.600	-0.034	0.479	-0.024	0.621
関係的要因	親への信頼			0.288	0.000***	0.213	0.000***	0.219	0.000***
	親との緊密さ			0.023	0.697	-0.046	0.400	-0.051	0.356
	親の学業干渉			-0.120	0.025**	-0.049	0.328	-0.064	0.207
	親戚との関係			0.019	0.714	-0.003	0.955	-0.017	0.738
学校での生活	教師との関係					-0.028	0.581	-0.044	0.388
	学校生活享受感					0.341	0.000***	0.312	0.000***
	学業満足感					0.198	0.000***	0.197	0.000***
友人の有無	友人の多さ							0.107	0.040**
	R^2	0.004		0.128		0.267		0.276	
	ΔR^2			0.124***		0.139***		0.009**	

注：* $p < .10$, ** $p < .05$, *** $p < .01$

ステップ1からステップ3まで一貫して有意であったが、女子生徒の場合はステップ1からすでに有意ではなかった。第2に、ステップ2における親・親戚との関係について、男子生徒では親への信頼、親との緊密さ、親の学業干渉、親戚との関係の全てが有意であったが、女子生徒で有意だったのは、親への信頼と親の学業干渉のみであった。

一方で、学校生活、学業、友人の多さといった変数については、男子生徒と女子生徒に共通して有意であり、 β 値にも大きな違いはみられなかった。

4. 考 察

4-1. 自己肯定感に及ぼす影響要因の影響程度

本研究では子どもの自己肯定感に及ぼす要因を確認し、それらの要因の自己肯定感への影響の程度について、実証的に検証した。その結果、自己肯定感に影響を与える要因には「性別」、「経済的要因」（「低収入」と「関係的要因」（【親への信頼】【親との親密さ】【親戚との関係】【親の学業干渉】【学校生活享受感】【学業満足度】【友人の多さ】）が挙げられた。

さらに特に「関係的要因」の方に着目し、上記の各変数（群）を一つずつ独立変数として階層的に投入した結果、「性別」はステップ1から4まで β 値にも大きな違いはみられないが、「低収入」の影響が最後のステップにおいて有意ではなくなった。このことは、経済的要因の自己肯定感への影響はある一方で、他者との関係性がいかにできているかという関係的要因が（少なくとも中学2年の）子どもの自己肯定感にとってより重要であることを示唆する。言い換えれば、親との関係が良好であること、学校が楽しく自分の居場所があること、友人がいることが子どもの自己肯定感に大きく影響している。

近年の子どもに関する研究において、子どもの学力に影響を与えるものとして人間関係の重要性が指摘されている。志水（2014）は子どもの学力格差の背景に「つながり格差」があるという仮説をたてている。また、湯浅（2017:4）は「子どもの貧困率は、家庭の所得が増えれば、減る」が、子どもが健全に育つためには「学力も意欲も人とのつながりも必要だし、居場所と感じられる場所も欠かせない」と主張している。さらに、生田（2009）が現在の貧困問題は「経済の貧困」だけではなく、「経済の貧困」と「関係の貧困」がともに広がり、その二つが重なり合う「現代の貧困」が拡大しつつあると指摘している。本研究においても、このような「人間関係」、「つながり」や「きずな」など、「関係」的なのは子どもの貧困を考える際、非常に重要であることが再確認された。

さらに以上の結果は、今後、就学援助費などの低収入世帯への経済的支援以外に、親

子関係の促進や学校における友人との関係調整などの支援もますます重要となってくることを示唆する。その担い手をソーシャルワーカーに求めることも一案である。ただし、家庭内に介入する難しさや、学校においても教師とどのように役割分担を行っていくかなど、実効力のある解決策に導くためにはさらなる検討を要することも確かである。

4-2. 自己肯定感に影響を及ぼす「関係的要因」

階層的重回帰分析の結果、関係的要因に関する変数のうち、ステップ4の最後まで自己肯定感に有意な影響を及ぼしていたのは、【親への信頼】【親の学業干渉】【学校生活享受感】【学業満足度】【友人の多さ】であった。一方で【親との緊密さ】【親戚との関係】は、ステップ3以降は有意ではなくなった。また、【教師との関係】はいずれのステップにおいても有意ではなかった。

前記のとおり、【親との緊密さ】【親戚との関係】も自己肯定感に影響を与えているが、「学校での生活」と「友人の有無」に関する変数を加えて投入することによって、これらの影響程度は低くなる。このことは、中学2年生にとって学校での生活や友人との関係の方が、親や親戚と過ごす時間よりも重要度が高いことを示唆する。これは子ども全般というよりは中学2年生ならではの特徴であるとも言えるかもしれない。つまり、思春期における子どもは親や親戚と一定の距離を置くようになる、あるいは日常生活における比重が家庭よりも学校のほうが高い、といった可能性が考えられる。

一方で、「学校での生活」のなかでも【教師との関係】と自己肯定感のあいだに有意性がみられなかった点は意外であった。というのも、先行研究では教師の存在が貧困リスクや自己肯定感の低下に対する防御促進要因であると考えられているからである（フレイザーら 2009；阿部 2015）。本研究でこのような結果となった理由として考えられるのは、中学生にとって日常生活における学校の比重は高いが、学校内の居場所や学業成績、また友人との関係といった事柄の方が教師との関係よりも重要度が高いという可能性である。また、現在の多くの中学校に共通する状況として、教師の多忙化によって現実的に日々学生と接し、彼らの人格形成に関わっていくという役割を果たしにくくなってきていることも考えられる（元永 2017）。

そのような可能性を考慮すれば、教師が教科指導や生徒指導などの本来の職務に多くの時間を割けるようにするためには、学校における働き方改革の検討が必要不可欠となるだろう。また子どもの健全育成をサポートする、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの設置を普及していくことも必要だろう。

4-3. 性別による自己肯定感の影響要因の差異

すでに述べたように、自己肯定感に影響を及ぼす要因は性別によっても若干の異なりがみられた。たとえば、親や親戚との関係について、男子生徒では【親への信頼】【親との親密さ】【親の学業干渉】【親戚との関係】のすべてが自己肯定感に影響することがわかった。他方で、女子生徒では【親への信頼】だけが影響力が大きいことがわかった。つまり、男子生徒にとっては親との関係性、親と過ごす時間、親の干渉、親戚との関係など全般的な親・親戚関係が影響するのに比べ、女子生徒にとっては尊敬できる親であることや、親が自分を大事にしてくれていると感じられることが他の事柄よりも重要であると言える。

中学2年生の女子生徒にとって、親とのかかわりの密度（一緒に時間を過ごす、一緒にご飯を食べるなど）よりも、親が自分を理解してくれている、大事にしてくれている、何でも話せるといった信頼関係の方が自己肯定感に影響を与えうるという点は非常に示唆に富む。たとえば、このことは思春期にあっても女子生徒の方が親と密なコミュニケーションをとっている傾向にある可能性を示唆する。さらに、一緒に過ごすだけでなく「話をする」という言語的コミュニケーションが大切であるということが、女子生徒に特徴的な結果だと言うこともできるかもしれない。

他方で、「学校での生活」や「友人の有無」といった項目においては男女間の差はみられなかった。つまり、学校が楽しいこと、学校に自分の居場所があること、友人が多いことなどは、男女いずれにとっても自己肯定感を左右する重要な事柄であると言える。

5. おわりに

本稿では、「京都子ども調査」を分析した結果、自己肯定感に影響を及ぼす要因には「性別」「経済的要因」「関係的要因」があることが実証された。さらに階層的重回帰分析をとおして、これらの要因の自己肯定感への影響の程度を明らかにした。特に、経済的要因以外の人間関係により着目し、子どもと家族、親戚、学校、友人との関係が子どもの自己肯定感にいかに関与するかを分析した。

その結果、「親・親戚との関係」「学校での生活」「友人の有無」のいずれもが自己肯定感に影響していることが明らかになった。ただし、その程度については、「親・親戚との関係」のなかでも【親への信頼】、学校生活のなかでも【学校生活享受感】や【学業満足感】、【友人の多さ】などがとりわけ重要であることがわかった。

さらに、学校生活や友人との関係は男女に共通して非常に重要な要因であったが、親との関係については男女で重要となる要因に若干の違いもみられた。

以上のような新たな知見が得られた一方で、課題も残る。たとえば、本研究は京都市という特定の地域での調査を分析したものであり、分析結果を子どもの自己肯定感の影響要因の特性として一般化するには限界がある。また、なぜそのような結果となるのか、男女の差などに関する詳細な検討は、質的な聞き取り調査などをとおしてフォローアップすることが望ましい。

今後、さらに具体的な提言を行っていくためには、他地域で同様の量的調査を行ったり、ミックス・メソッドによって分析を補足したりという形で研究を発展させることが求められる。本研究でも上記のような環境なり経験、人との関係をどのように構築していくかについて、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの設置など、ソーシャルワーカーの役割に言及したが、具体的な支援の仕組みなどをさらに検討していく必要がある。以上のような研究の発展を通じて、今後こうした課題にも取り組んでいきたい。

付記

本研究は、科学研究費補助金基盤研究 C（課題番号 15 K 03981，研究代表者：埋橋孝文）による研究の成果の一部である。

注

(1) 「学校生活の人気」に含まれる項目は下記の通りである。

「学校生活で充実感や満足感を覚えることがあった」、 「学校やクラスで周りから注目されるような経験をした」、 「クラスの中で存在感があったと思う」、 「クラスで行う活動に積極的に取り組んでいた」、 「クラスやクラブの活動でリーダーシップをとることがあった」、 「勉強や運動などで友人から認められていたと思う」、 「学校内で自分を認めてくれる先生がいたと思う」、 「在籍している学校に満足していた」、 「仲の良いグループの中では中心的なメンバーであった」、 「学校内に自分の本音や悩みを話せる友人がいた」。

参考文献

- 阿部彩（2015）「子どもの自己肯定感の規定要因」埋橋孝文・矢野裕俊編著『子どもの貧困／不利／困難を考える－理論的アプローチと各国の取り組み』ミネルヴァ書房。
- 生田武志（2009）「経済の貧困と関係の貧困－野宿者と子どもの視点から」（講演録）『大阪の子どもたち：子どもの生活白書』， 61-79。
- フレイザー，マーク・W. 編著／門永朋子・岩間伸之・山縣文治訳（2009）『子どものリスクとレジリエンス－子どもの力を生かす援助』ミネルヴァ書房。
- 河越麻佑・岡田みゆき（2015）「大学生の自己肯定感に及ぼす影響要因」『日本家政学会誌』 66(5)， 36-47。
- 志水宏吉（2014）『「つながり格差」が学力格差を生む』亜紀書房。
- 高垣忠一郎（2006）『生きることと自己肯定感』新日本出版社。
- 日本青少年研究所（2009）「中学生・高校生の生活と意識調査報告書」。
- 古莊純一（2009）『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか－児童精神科医の現場報告』光文社新書。
- 元永拓郎（2017）「子どもたちとゆっくりかかわれない学校現場：教師の多忙さを考える」『児童心理』 71（13）， 1133-1137。
- 矢野裕俊（2016）「子どもの貧困と自己肯定感」『Int'l ecowk』 1058， 17-24。
- 湯浅誠（2017）『「なんとかする」子どもの貧困』角川新書。

Rosenberg, M. (1979) *Conceiving the Self*, Basic Books.

An Empirical Study on Influencing Factors of Self-affirmation of the Child :
Based on the “Children’s Survey in Kyoto”

Hou Kaku, Hiromi Tanaka, Saeah Lim and Mai Shi

By a factor analysis and hierarchical multiple regression analysis on the “Children’s Survey in Kyoto”, this study confirms the influencing factors of self-affirmation of the children and examines their varying degree. As a result, influencing factors including “Gender”, “Economic factors”, and “Relationship factors” are empirically verified. Beside “Economic factors”, the “Relationship factors” such as “Trust to the parents and relatives”, “School life” and “Presence of friends” also have remarkable influence. For example, the factor “Trust to the parents” in “Trust to the parents and relations”, “Enjoyment of school life”, “Satisfaction from schoolwork” and “Abundance of friends” in “School Life” have significant impact on the self-affirmation of children. Moreover, while the “School life” and “Abundance of friends” are of great importance to both boys and girls, the factor “Trust to the parents” seems to act differently by gender.

Key words : Self-affirmation, Influencing factors, Factor analysis, Hierarchical multiple regression analysis